

残日読書日記（六）

山頭火を愛する経済学者

渡辺利夫著『台湾を築いた明治の日本人』

井上 智重

熊大病院から退院後、リビングでパソコンに向かう日々が増えた。朝、起きてきた力ミさんは食卓の前に座り、新聞を広げる。私は立ち上がり、朝食の用意をする。食卓の上のパソコンや本などを動かし、食事を並べる。いま、これが習い性となつた。

「昨日、何時まで起きていたの」と言われる。誤魔化しても隣の和室に寝ている力ミさんは気づいており、「もう少し早く寝ないと」と叱られる。力ミさんは不眠症で、朝が遅いのだ。後片付けと洗濯は力ミさんの役目。掃除機をかけ、洗濯物を干し、再びパソコンに向かう。そうこうしていると、昼食だ。人間はよく食べる動物だと知った。「夫から愛されていない妻は太るのだつて」と力ミさんが言う。こういう怖い言葉がときどき飛んでくる。

肝臓癌の手術を受けたと聞き、気を遣つていただいているが、本人はかえつてアクティブだ。かなり前から暴走老人となり、周囲を困らせているが、それがいつそひどくなつたのはつい最近だ。パソコン上の作業に時間がかかる。

昭和三年六月、下通の雅楽多の裏手にJOGKが開局する。九州を管轄するラジオ局で、山頭火は旅先でラジオを聴きながら、第二のふるさと熊本に思いを寄せている。「JOGK、ふるさとからちりはじめた」といつた句さえ作っている。開局記念に五高教授八波則吉に作詞を依頼し、「JOGKの歌」が作られており、音源を探して貰い、NHK熊本児童合唱団に歌つていただくことになつた。

甲斐青萍が描いた明治・大正期と昭和の城下町の絵図で雅楽多の場所を示し、かつ映画館が軒を並べた新市街の話や山頭火が見た映画などを紹介し、最後にチャップリンの『街の灯』（山頭火は見ている）のテーマ曲をピアノで演奏し、終えるという趣向。

凝りだしたら、切りがなくなり、皆さんを困らせる。果たして来てくれるのかと心配になり、切手やはがきを買って来て、せつせと案内状を書いた。貰つた相手は迷惑であつただろうが、あふれるように来ていた。蒲島知事の顔もあつた。あきらめて帰られた方もいた。

前座の方は後を端折つてしまつたが、映画館のスクーリンに映し出すと、目の前に迫るものがある。音声も素晴ら

しく、朗々と歌声が響いた。編集しているので余計なもの
が写らず、舞台転換が早い。現存する日本の最古の映画『紅
葉狩』も舞台を撮つたものだが、「映画作りにはこういう
手もあるのか」と再発見した感じであつた。

秋晴れの十月二日、益城町文化会館に渡辺利夫先生の講
演を聞きに行つた。このことを書かないと何か義理を欠く
気がする。東京工大名誉教授。専門は開発経済学・現代ア
ジア経済論。吉野作造賞、後藤新平賞などを受けておられ
るが、『種田山頭火の死生』『放哉と山頭火』という著書が
あり、無理をお願いし、銀座での舞台劇の前に山頭火の話を
をしていただいた。学生時代、不安や抑鬱に悩まされ、そ
のとき出会つたのが山頭火の句集だつたという。

拓殖大学学長・総長を務め、現在は顧問。日本李登輝
友の会会長でもある。益城町での講演も台湾と熊本県の
交流推進を目的にしたもので、主催は地元の志賀哲太郎
顕彰会〔註〕だつた。

そこで話されたのは、台湾というフロンティアの地で活
躍した八田與一と磯栄吉という二人のエリート技師のこと
で、私はとても感動した。八田は台湾に東洋一のダムを築
き、台湾の中学校の教科書に載つている。磯は「蓬萊米」
の開発に、実に二十年近い歳月をかけ、ついにこれに成功
し、「台灣農業の父」といわれる。二人とも日本より台湾
の方でがずっと知られている。八田も磯も明治十九年
(一八八六)生まれで、八田は東京帝大工科大学、磯は東

北帝大農科大学(北大農学部の前身)を出て、台湾總督府
に勤めた。「エリート技師としての職分を存分に果たした
二人に、私は明治の精神をのぞきみている」と渡辺先生は
語る。

台湾の南西部に嘉南平原がある。

一五万haに及び、台湾の全耕作地の五分の一に当たるが、
「看天田」といわれていた。不作、凶作、豊作は天の采配
次第で、人為ではどうにもならない。中央山脈の脊梁が南北
に連なり、雨季の大量の水は分水嶺から急峻な山地を流れ
落ち、平原を奔流し、氾濫して田畠を埋没させてしまう。
乾季には土壤が干上がり、固まつて鋤で耕そうにも歯が立
たない。

八田はこの荒涼とした平原を「米と砂糖の一大供給地」
に変えられないか、と思つた。ダムを造り、雨季には水を
制御し、乾季での給水を確保する。網の目のように水路を
走らせる。この巨大プロジェクトに理解を示してくれたのは
総督府土木局長山形要助だつた。

ダムの適地を探し、踏査を続ける八田の姿に私は藤沢周
平の時代小説の世界を見る思いがした。また、通潤橋を造つ
た布田保之助を思い重ねた。正確を期するためもあり、渡
辺先生の著作『台灣を築いた明治の日本人』(産經NF文庫)
を横に置いて書いているが、その帯には「国家のため台灣
住民のため己の仕事を貫いたサムライたち!」とある。
八田が探し当てたダムの場所は曾文溪支流の上流部、烏
山頭。嘉南平原に給水するには足らず、烏山嶺に三ヶ所に及

ぶトンネルを掘削、曾文渓本流の水を引き入れる。ダムか
ら放された水は、地球を半周するほどの総延長となる。

巨額な工事費をどこから捻出するのか。公費ですべてま
かぬことは難しい。受益農民から農民組合を通じて経費
の一部を徴収するという手もある。そこまで考えて、山形
に計画書を出した。八田を買っている人物がほかにもいた。
民政長官下村宏だ。計画書は山形から下村に上げられ、長
官室に呼ばれ、「君に不抜の信念があるならば、この案を
総督府公式の計画書として練り上げ、明石総督に上申する」
と言わされた。

この計画案は地元の農民らに伝わり、陳情書が出され、
一万一千五百人の署名簿が集まり、工事の方は受益農民や
農民組合が応分の費用を支払い、国が補助金を大正九年か
ら六年間にわたって分割公布するということが決まった。
大正八年（一九一九）四月、八田、三十三歳であつた。

トンネル工事でオイルシェール層に突き当たり、爆発事
故を起こしたことや関東大震災で工期を延長せざるを得な
かつたが、昭和五年五月に完成した。全長一二七三メートル、堤
高五六メートル、満水時の貯水量一億五〇〇〇万トン。米国アリゾ
ナ州とネバタ州の州境に昭和十一年にフーバーダムが完成
するまで烏山頭ダムは世界最大規模を誇った。この時、八
田は四十四歳である。

八田は昭和十七年五月八日、五十六歳で亡くなっている。

フィリピン軍司令部からの要望で綿作灌漑計画の指揮者
として部下三人を率いて、広島市宇品港から「大洋丸」に

南方開発派遣要員ら千三百六十人とともに乗船。五島列島
を過ぎたところで米軍の潜水艦搭載の魚雷で沈没、殉職し
た。鳥頭に子供らと疎開した妻は終戦を迎えた年の八月
三十一日夜、ダムの放水路に投身自殺をしている。

磯の蓬萊米についてはアナザーストーリーが面白い。終
戦後も磯は台湾に残り、さらに改良を加え、アジアの全域
に導入された。インドのパンジャーブ州の飢餓に心を痛め、
磯と台湾国民政府の協力を得て蓬萊米をインドのこの地に
持ち込み、飢餓から救つたのが杉山龍丸だ。祖父は政界の
黒幕といわれた杉山茂丸で、父は夢野久作。

ことしは日中国交正常化五十周年であったが、台湾人に
とっては「国交のない苦難の時代」であった。太平洋戦争
では二十万以上の台湾の若者が日本の軍人・軍属として前
線に向かい、三万人を超す戦死者を出した。空襲を受けた
地域もある。

渡辺先生は『台湾を築いた明治の日本人』のあとがきで
「日本は韓国には客観的事実を伝えるだけでいい。他方、
台湾にはその親日感情に甘えるのみでいいのか。なすべき
外交をなさないでいいはずがない」と書いている。

〔註〕志賀哲太郎は慶應元年、益城町生まれ。九州日日新聞記者や國
権議員となるが、台湾に渡り、大甲（台中市）の小学校の代用教
員を勤めた。一生独身で、子供に慕われ、漢学教育に熱心だったが、
学校当局の方針に悩みも持っていた。大正十三年十二月二十九日、
水源池に身を投じた。羽織袴姿の正装で覚悟の自殺だった。五十九
歳。葬儀の列は一キロに及んだという。山の中腹に教え子によつ
て大きな墓碑が建てられた。平成二十七年顕彰会が発足。